

豪雪過疎地域の除排雪における自助共助に関する人類学的研究

小西信義（北海道大学大学院文学研究科）

1. 本研究の背景と目的、フィールドの概要

文化とは、「心の社会性が人類進化史的に文化・生態との間に動的関係を持つ中で、人間が所与の課題解決状況に対応するための行動戦略として開発、調整、伝達されてきたものである」という側面を持つ¹⁾とする立場にたってみれば、雪国の文化もまた、北方という厳しい環境の中で、人類が長年かけて育んだ、環境適応への行動戦略とみることができ、克雪の術とも換言できる。現在、この克雪の術は主に自然科学分野の研究・開発が盛んで、人文科学的分野からの研究は圧倒的に少ない。

このような背景から、人類学的アプローチから、宿命的に現代人を襲う北方環境への行動戦略とそれを基盤とする心のしくみを除排雪に注目し描き出すため、2011年1月から2月の21日間、岩見沢市美流渡で、フィールドワークが展開された。

美流渡は、北海道岩見沢市に位置する約1km四方の範囲の盆地にある小集落である。362世帯人口632人が暮らし、そのうち48.7%が65歳以上の高齢地域であり（平成22年8月美流渡出張所）、高齢者の大半が年金受給者である。

表-1 2011年1月・2月の気象統計（気象庁）²⁾

月	気温(℃)				雪(cm)			大気現象		
	平均			最高	最低	降雪			最深積雪	雪日数
	日平均	日最高	日最低			合計	最大			
1月	-5.7	-2.9	-9	0.8	-14.8	337	33	133	30	
2月	-2.9	1.1	-7.6	8	-12.1	90	12	116	23	

フィールドワークを展開した期間（2011年1・2月）における気候（表-1参照）は、気象庁札幌管区気象台のホームページによれば、降雪量・積雪量ともに、1月は例年より多く、豪雪の月であった。一方、2月は雪量も落ち着きを見せ、比較的過ごしやすい気候であったと考えられる。しかし、2月で降雪量の割に、積雪量が例年より多いのは、融解と凝固を繰り返し、1月の積雪が2月に持ち越されたと考えられ、1月の硬度の高い積雪をどう克服していくかが、今冬の特徴であったと考えられる。この地域は、豪雪地帯対策特別措置法に基づき、豪雪地帯の指定を受けている。住宅の大半は木造平屋建てで、寒冷地仕様の機能をもつ家屋は極めて少ない。

2. 美流渡の除排雪をめぐる行動戦略

2-1. 除排雪活動への視座

本稿は自然誌という方法論を援用する。それは、人間の活動の体系的記載であり、それは経験的観察方法で記載される³⁾。対象とする集団の各個体を同定して識別し、観察対象の時間的・空間的な設定を行いながら観察者が自分の目で観察し、観察者が対象と同一化し、世界を内側から経験することである。これにより、文化の個人差とその内容を明らかにするのみならず、個人差をとおして個体と集団との関係を明らかにすることができる。このような方法論により、人びとがどのような価値基準をもって、なぜそのような行動をしている

のかということをはっきりさせることができる。

本稿の「人間の活動」とは、まさに除排雪である。除雪とは、自身の行動範囲を確保したり、家屋の損壊を防ぐために、別所に積雪を移動することであり、排雪とは、除雪された雪が自然に溶けることが許される場（空き地など）に移動することである。フィールドワークによって美流渡の人びとの除排雪活動は、個体によって様々な様相を見せた。

2-2. 除排雪活動の空間的・時間的利用と個人差

除排雪活動を体系的に記載するため、右のような空間的・時間的設定を行った。

「空間的設定」は、除排雪を行う家屋周辺の範囲を示すもので、4つの範囲の除排雪が整うことで、ひとつの家屋が雪害からのリスクが除かれることとなる。また、外出経路の確保や家屋の破損防止などの観点から除排雪範囲の優先順位の認識が人びとの間にある。

表-2 除排雪活動の空間的・時間的設定表

時間的設定	空間的設定	高 優先 順位 低
早朝 (降雪ごと日常)	玄関から公道までの最低限の通路除雪	
早朝～午前 (積雪量に応じて)	窓下	
早朝～午前 (積雪量に応じて)	屋根・車庫など	
午後～夕方 (積雪量に応じて)	家屋周辺の比較的優先順位の低い箇所	

除排雪活動の範囲を規定するのは、個体ごとの活動可能範囲である。その際、除排雪道具（スコップ・ママさんダンプ・除雪機など）や性差・体力差などの個体差、その範囲を除排雪するか否かの優先順位が説明変数となる。例えば、除排雪活動と個体の体力差（ADL値^{*1}）の関係を指摘すると、ADL値が高ければ高いほど、除排雪活動範囲が広くなることに有意性が認められた（ $p=0.0024$ ）。しかし、このような体力的制限を埋めるため、女性は「二段飛ばし」をしたり、ママさんダンプに蠟をぬったりして、男性との体格差や体力差⁴⁾を埋める工夫が施された。また、体力のない男性もスコップの柄の持ち方を替えることで、インターバルを置きながら持続可能な除雪活動を意図的に行っていた。これらは、除排雪活動範囲を規定する体力差・性差などの個体差がもたらす行動的調整機能である。一方、通路除雪の有無は他者がその個体の安否確認をするバロメーターになっていたり、屋外からの冷気を遮断するため意図的に窓下の積雪を残していたり、「きれいにしたい」と雪害リスクの低い箇所まで除排雪を行う個体も確認され、個体ごとの優先順位の認識が活動範囲をも規定している。

さらに、除排雪活動範囲は、活動範囲の時間的利用にも制約を与えた。「時間的設定」は、4つの範囲の除排雪活動を行うのに適した時間帯のことであり、例えば、屋根上の雪下ろしは、屋根からの自然落雪などを避けるため、雪が凝固している午前中までに行うことが肝要であるという、人びとの自然環境への認識で設定された。

以上、除排雪活動の時間帯や範囲を設定して分析することで、除排雪活動の個人差が浮かび上がる。除排雪活動は、降雪・積雪の度合いやその日の天候などによって、個体の日常生活を大きく規定し、人びとは目まぐるしく変わる環境に対し、性差や体力差などの生物学的な

*1 Activities of Daily Living の略。生活を営む上で不可欠な日常生活動作のことで、ADL 値を測定することでその個体の自立度が表現できる。本稿では、文部科学省「新体力テスト」のスクリーニングテストを用い、男性7名（70-87歳、平均77.6歳）・女性12名（76-86歳、平均80.3歳）を対象にADL値を測定した。出村ら⁵⁾により、ADLの信頼性・有効性に有意な関係が示されている。

個人差と自然環境への認識とを照らし合わせ、積極的に克雪の術を発揮していた。

しかし、このような個体差は除排雪活動の個体における限界値を示すことにもなる。その個体ごとの限界を埋め、雪害のリスクを軽減させるのが、他者の介在（除雪ボランティアや家族の手助け）である。「除雪ボランティア」とは、除排雪活動が困難な家庭に対し、有償または無償で援助をする近隣の人びとであり、ボランティアを要請した個体ごとに援助の度合い（除排雪活動範囲）が異なってくる。大半が除雪機を所有しており、主に、被援助家屋の屋根からの落雪で積もった窓下を早朝から午前にかけて除雪機で排雪する。

2-3. 集団に見られる除排雪活動の行動戦略

合併前の栗沢町では、「福祉除雪員制度」がとられ、民生委員を通じて、除排雪が困難な世帯とその世帯を援助する除雪員を名簿化させ、除雪員には時間給（自己負担 2 割）を支給し、効率よく作業できるように、除雪機の貸出が行われていた（合併により除雪機は無償譲渡）。現在、岩見沢市では先述の除雪ボランティアの活動を支援する「地域除排雪活動支援事業」が展開されている。この制度



図-1 2011 年美流渡除排雪援助活動地図

は、除排雪が困難な世帯の名簿化を各町内会を通じて行わせ、当該予算に応じてその世帯と町内会に助成金を支給（2011 年は当該家庭に 3,300 円、町内会一世帯ごとに 100 円）するものであり、除雪ボランティアの調達や助成金の配分は、各町内会の協議に委ねるというものである。どちらの制度も地域内の除排雪活動を支援するものであるが、合併により助成額は大きく減少し、より被援助者の負担度は高くなった。また、自治体によって組織化された助け合いは、市町村合併という社会的背景により希薄となり、さらに、高齢化による除雪ボランティアの担い手の減少やそれに伴う一人当たりの担当世帯の増加は、除雪ボランティアの負担度をさらに高めた。そのため、各町内会では、現行の制度を基盤としつつも、除雪ボランティアの調達と助成金の配分方法・減額された助成金を補うための援助者への報酬の創出・設定という主体的な助け合いのシステムを再構築せざるを得なくなった。

例えば、末広町では、担当する一世帯あたりにつき、助成金は被支援世帯に分配され、一律 3 万円が被援助者の家計から除雪ボランティアに前もって支払われる。また、東栄町では、除雪ボランティアの実働時間に応じて被援助者が支払う仕組みもあり、各町内会によって違いがあることが確認されている。このように、町内会という単位の中で、協議が行われ、それが冬季つつがなく行われることで、美流渡全体の雪害からのリスクが減らされる。図-1 からも除雪ボランティアの活動範囲は、大半が同一町内会内の援助活動に留まっている。

このような社会的背景の下、人びとは町内会を仲立ちとし、行政の制度を基盤にしながら、一律の“住民ルール”をもって、個人・除雪ボランティアの負担度を経済的・心理的に平均化する手段を構築した。この町内会の存在は、実際の除排雪活動はしていないが、地域内の助け合いを円滑に機能させ、助け合いを維持させる、個体の除排雪活動を補完する集団単位

の行動戦略と言える。次章では、それらの行動戦略の基盤となる心のしくみを検討する。

3. 除排雪をめぐる自助・共助の基盤となる互酬性の思考

複数の援助者の除排雪活動に帯同する際、「地域除排雪活動支援事業」の対象者となっている被援助者から援助者に向け、除排雪後に現金や物品を渡そうとする場面に多く遭遇した。援助者はそれを拒もうとし、被援助者は執拗に渡すやり取りが数回繰り返され、結局、援助者は恐縮した様子で、それを受け取った。被援助者はすでに町内会で定めてある謝金をその援助者に支払っている。それにも関わらず、追加の謝金のやり取りが行われ、援助者は、「あえてもらってあげた」と観察者に言った。それは、一見、観察者に「金銭にがめつい」と思われることを避けるための申し開きであるようだが、このようなケースは他の援助者にも見られた。また、缶ジュースやお菓子、おかずなどで返礼する場合も見られた。

前章で触れたように、除排雪活動は、近隣の援助を得ながら展開されていくものである。たとえ援助者であっても相当のリスクを抱えながら、他者への援助を行う。そのことを被援助者は経験的に理解していることであり、むしろ、理解以上にリスクを犯してでも援助してくれることに感謝の念を抱き、さらには援助者の仕事ぶりを見て、「無理なことを頼んでしまっている」という罪悪感を抱くこととなる。それは、一律に決められた報酬だけでは埋めきれない“負債”なのである。被援助者は、その“負債”を現金などを受け取ってもらうことで即時的に帳消しにしたかったのではなかろうか。一方、援助者は罪悪感を抱いてもらわぬよう現金を受け取ったのであろう。この目に見えぬやり取りである即時的交換の成立を前提にして、「次もお願いします」という言葉を添えた返礼が行われたのである。その返礼は、即時的で後回しにならない分、次の積雪時の援助要請をさせやすくするのである。

この場合のように、彼らは利己的・利他的のどちらかに偏らない行動のやり取り（互酬性）を繰り返すことで、援助－被援助の関係を維持していき、この関係が維持されることで美流渡の除排雪活動が展開され、雪害リスクを減らしていくことができるのである。そして、この援助－被援助関係の基盤となる互酬性の原理を円滑に機能させるために、“住民ルール”を作る町内会という集団単位が存在しているのである。「困ったときはお互い様」という彼らの助け合いの社会的規範は、個体および集団の行動戦略の基盤となって、豪雪過疎地域美流渡を優しく包み込み、彼らの生活を支え、北国の文化を育んでいくのである。

4. 参考文献

- 1) 煎本孝, 2010: 人類の進化と北方適応. 文化人類学, **74**, 4, 541-565.
- 2) 国土交通省気象庁, 気象統計情報 (<http://www.jma.go.jp/jma/menu/report.html>)
- 3) 煎本孝, 1996: 文化の自然誌, 東京大学出版会.
- 4) 須田力ら, 2007: 豪雪地住民の人力除雪の作業能力と体力要素. 北海道の雪氷, **26**, 83-86.
- 5) 出村慎一ら, 2000: 在宅高齢者のための日常生活動作能力調査票の作成. 体力科学, **49**, 375-384.